

W. M. Vories と A. A. Hyde (1)

浜 田 清 夫

はじめに

大正以来庶民に親しまれてきたメンソレータムは、近江兄弟社の倒産を機に、「キリスト靈藥」としての特種な任務を解かれ、数ある売薬品のひとつとして世俗化した。兄弟社は、その後の自主的会社整理の努力により、ようやく再建が可能となったが、この不幸な出来事は、特異な社風を持つ同社の社史に、悲しい転機を画することになった。またまたま百周年を迎えた同志社にとっても、「ワン・パーパス同志社」の作詩家として、ヴォーリズの名は忘れ難い。質素で、徹底した愛と正義を掲げたこのピューリタンは、平信徒としてとどまり、独立自給の伝道の資金源として、かつまた勤労・節儉・召命・恩寵の「富の福音」の実践道場として近江兄弟社を起した。個人的救いを求める（求道）に止まらず、「汝等、全世界に行きて、すべての民を教えよ」（マタイ二十八・十九・二十）の（伝道）使命感到に燃え、その昔セーレムに着いたウィンスロップとアーベラ号の同行者が築こうとした「丘の上の町」を、異端の地近江に建設しようとした彼の聖なる試みは、ついに蹉跎を

きたしたのであろうか。われわれには成功の記録としか映らぬ彼の自叙伝は、『失敗者の自叙伝』^①（昭四十五）なるタイトルが示すごとく、今度の倒産を「神の国建設」事業の失敗として予示していたのであろうか。彼がこの地に落とした一粒の芥子種は、あとに遺された教会に、病院に、YMCAに、学校に、図書館に、そして感化を受けた数知れぬ人たちの心に、生き続けている。いつの日か、「空の鳥が来て、その枝に果を作るほどの木」（マタイ十二・三十二）に生長することを祈りたい。

本稿では、まず倒産の起こした波紋を追いつ、それが持つ意味を考え、次に主題の示す「ヴォーリズとハイド」の邂逅^{かいこう}、そして最後に、この二人を結びつけた糸を手操ってみた。

倒産の波紋

一昨年（昭和四十九年）、年の瀬も迫る十二月二十三日夜、「メンソレータム」の名で知られる株式会社近江兄弟社（本社・滋賀県近江八幡市魚屋町元、資本金九千六百万円、筒山実社長、従業員二百六十余名）は、経営が行き詰まり、大

津地方裁判所彦根支部へ、商法による会社整理を申し立てた。石油危機以来の不況の深刻化と共に、企業の経営破綻はすでに日常茶飯事となり、日本熱学やその大型企業の倒産にも、もはや動じなくなっていたさしもの世人も、クリスチャン企業の、キリスト降誕祭前夜の倒産という、皮肉な回り合わせだけに、時ならぬショックを受けた。祖父父母の代から、家庭常備薬「メンソレータム」の愛用者として、競合商品に目もくれず、この「キリスト霊薬」に節を守り通してきた心ある支持者たちには、「不況に負けた温情経営、信者社員に冷たいイヴ」の新聞の大見出しは、荒む世相をそのまま映し出すものとして冷酷に響いた。「幹部社員はビジネスマンとして有能である前に立派なクリスチャンであることを要求され、ガメツさのない温情経営、他の製薬会社が特約店づくりに狂奔している時、問屋に御売りして、あとは薬局まかせの殿様商法」というような小見出しは揶揄と嘲笑としか映らなかった。

売り上げ不振、無理な多角経営（不動産部の用地買収、造成販売、室内装飾品・木彫品の輸入など）、知名度過信、主力取引銀行の欠如、不

況対策の遅れなど、お馴染みの倒産原因以外に、「企業の収益を社会事業に還元する特異な経営がもはや通用しなくなった」、「兄弟社が傾く要因は、内部的にいろいろ複雑なものがあつたのだろう。が、創業の心を生かそうという努力が続けられた。それを続けたが故に傾いたのだともいう」など、批判、同情、慨嘆の声も聞かれた。創業の経緯を多少とも知る者にとって、このニュースの意味するものは、もっと深刻で、仄かな希望も闇に吸いこまれるような、心もとなさに通ずるものがあった。

「そは、たれにもあれ、天にましますわが父の御旨を行なう人、すなわち、これわが兄弟、姉妹、母」（マタイ十二・五十）を社名の典拠に、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（帰化名・一柳栄来留）と共に、進んで神への愛を誓った（bond）同労者たちが、「すべての徳を結び合わせる帯（bond）」（ロサイ三・十四）によつて固く結ばれた兄弟社を創り、近江八幡に、自生の（indigenous）、自給自立、平信徒の伝道の輪を広げようとした。その趣旨は、兄弟社の伝道誌「湖畔の声」の発刊の辞に、はつきりと謳（うた）われている。

二千年の昔、イエスが風光明媚（びんべい）のリヤラ湖辺に立ち雄大莊嚴なる御声を天下に揚げ給ひしを、我はわが琵琶湖のほとりに立ちて反響せんとする声である。我はわが同胞の不安なる生涯に大いなる福音を宣伝せんとする者であつて……愛神愛人の旗幟を立て世のすべての暗黒と戦わんとするものである。^⑤

コロラド大学在学中の一九〇二年、カナダのトロントで開催された第四回S・V・M（スチューデント・ボランティア・ムーブメント、海外伝道学生奉仕団）世界大会に、コロラド州代表として出席した。キリスト教運動の元老や、人格識見ともに優れた名士から世界の情勢を聞き、特に中国伝道中の婦人宣教師から、「扶清滅洋」のスローガンを掲げた義和団による外国人宣教師のむごたらしい迫害のかずかず、そして、十字架上のキリストに倣（な）つて従容として死についた殉教者たちの生々しい報告に、血も氷る感銘を受けた。これが回心の体験となり、ヴォーリズは久しく温めてきた建築家志望を抛（な）ち、名利榮達よりも魂の救済という、地上最大の事業に一生を献げる道を



W. M. Vories

選んだ。^⑧

ミッシン・ボードの有給伝道師となるよりも、自給の伝道で自分の信仰を試す方を選び、滋賀県立(八幡)商業学校の英語教師として迎えられたのは、明治三十八年(一九〇五)二月であった。熱心な伝道は、アメリカ出発の前から始まり、船上でも続けられた。八幡では、英語を習いたい本音もさることながら、およそ己に対する精神的・道徳的厳しさというものを知らなかった青年たちは、瞬く間にこのピューリタンのアメリカ青年の心の虜^{もよほ}となった。彼のひたむきな努力の成果は、バイブル・クラス誕生、八幡YMCA二九〇七建設、受洗者続出と、具体的な形をとり始めた。生徒の出身がほとんど商家であり、本願寺派別院二つに加えて、十八の寺が

お互いに隣にせめぐ仏教徒の町であり、その上、日露戦争の勝利が国粋論者を増長させていただけに、無垢の青年の間に燎原^{もろはら}の火のごとく広まる耶蘇教は無限の脅威として映り、その元兇を追放すべしという怒嗟の声が湖東に広まった。

そう言えば、この国粋保存の波に洗われたのは、ひとりヴォーリズに止まらない。当時、八幡教会の伝道者は、彦根より出張してくる大橋五男氏であった。この教会は、明治十三年頃から新島門下の海老名弾正、宮川経輝、原田助などが伝道して起こしたものであるが、明治二十年頃には相当な数の信者を集めていたものの、日露戦争が終わったころには男四人、女五、六人に寄せ細り、集会場も衰微の極に達していた。ちょうどこの時、京都御室の西牧場の当主、西幸治郎氏が現れた。八幡で生まれ、牧場建設を夢み京都に出た彼は新島裏に会ってその人格に打たれクリスチャンとなり、故郷に教会を建てる決意をした。この目的のために営々と貯金を続け、教会の敷地を購入するために来幡したのである。ヴォーリズ自身も生徒の間で知・徳・体の三育のため、かつ伝道のためYMCA

A建設運動を起こし、本国の篤信家に寄付を依頼するかたわら、YMCA敷地を買う交渉を進めていたが、地元の者は、誰も他人の口を恐れて、ヴォーリズに土地を手放そうという者はなかった。バイブル・クラスや教会での代理の説教など、ヴォーリズが数少ない信者の励みになっていたことを知った西氏は、教会敷地の一部をYMCAに提供することを申し出た。^⑨

八幡商業学校在職わずか二年で解職されたが、素志を貫くため八幡に踏み留まる決意をし、伝道のための自給をはかるため、京都YMCAの一室でヴォーリズ建築事務所を開く。最初の福祉厚生事業として肺結核療養所(一九一八)を建て、大正九年(一九二〇)メンソレータムの製造販売会社を創設、売上高十%に相当する商標使用料が米国メンソレータム本社に支払われるが、これから述べる篤志家A・A・ハイド社長の厚意により、そのうち三十%のみを米メ社に支払い、残り七十%が財団法人近江兄弟社を通して社会事業に還元されることになった。^⑩こうして近江ミッシンの基礎は固まった。滞日六十年、社会公共事業に幾多の功績を残し、それにふさわし

い榮譽を担って、昭和三十九年（一九六四）、八十三歳の生涯を閉じるが、「自分の宝を地上にたくわえることをやめなさい……自分の宝は天にたくわえなさい」（マタイ六・十九・二〇）の教え通り、何の遺産も残さず、すべてを兄弟社の後継者に譲った。

素志を継承する者の責任は重い。倒産の日から必死の再建計画が進められた。それにもかかわらず、昨年二月十二日、米メ社G・H・ハイド社長は兄弟社にメンソレータムの製造販売契約破棄を通告、暫定的に「当分の間の製造販売継続」を認めた。そうこうするうちに、米メ社とロート製薬との間に交渉が進み、四月二十三日メンソレータムの製造販売独占権はロート製薬に移った。商標使用料は今後十年間五〜十%と伝えられているが、多分これはロートでメンソレータムを新しく製造販売するに伴う投資や危険を見込んでのことと思われるが、これが純然たる経済計算に基づく取り引きである事に間違いはない。

一方、大津地裁に会社整理を申し立てていた株式会社近江兄弟社は、同地裁任命の検査役が七月十七日「自主再建可能」の結論を出しに及んで、「メンソレータムの製造は出来

なくても、独自の薬品を開発し、経営規模を縮小すれば自主再建できる」として整理申し立てを取り下げた。整理に入った当初三十七億円あった負債は、その後の定期預金相殺、手形決済、財産処分などにより、九月十二日現在で十三億円に減り、更に手持ち不動産の売却で全額返済できる事が確実であり、厚生省から許可のおりた新商品の家庭薬「近江兄弟社メンタム」の製造を開始し、九月十六日から、愛称「メンタム・キット」として市販される事になった。成分も効能もメンソレータムとはほとんど同じで、値段も変わらぬという。

株式会社近江兄弟社の躍おどろきにより、ロヤルティ収入および配当金の収入が皆無となり、財団法人近江兄弟社は、独立採算制のヴォーリズ記念病院を除く財団経営事業に重大影響を受け、後遺症を残しつつも運営を続行、または一時停止された機能を再開しつつある。

会社が再び活動を開始した今、半年余りの休止と、主力商品名が片仮名二字だけ短くなった点を除けば、一見何ごとも起こらなかつたかに見える。しかし、米メ社によるメンソレータム製造販売独占権剽奪せうたつは、象徴的な意味を持ち、近江ミッション以来の歴史に重大

な転機を画する。

ヒイド (A. A. Hyde)

「まず神の国と神の義を求めよ。然らば、これらのものは、すべて添えて与えられん」（マタイ六・三十三）の聖句は、明日のことを思わずに、今を生きることに尽き、今日の失望は明日の希望を培うために神が計画した建設の試練である、と教えている。八幡商業在職満二年目の二月十日、西牧場主の提供した教会敷地に待望のYMCA会館が落成し、ヴォーリズは有り金をはたいて建築費を支払い、ほっとした。そこへ届いたのが教師解雇の通知である。無一文、無収入になった恩師が「粥かゆをすすってでも八幡伝道を続けさせて下さい」と懸命に祈るのを見て感動し、同労者の一人となることを申し出たのは、三十六番目の生徒受洗者、吉田悦蔵氏であった。卒業を旬日後に控えた吉田は、このことがなければ、高商に進むか、コペンハーゲンに留学するはずであった。義を見てせざるは勇なきなりと考へ、母からの月々の仕送り十七円でヴォーリズと清貧を分かち決心をした。事情を伝え聞

いた京都YMCA名誉主事G・S・フェルプスから激励の手紙と一緒に二十五ドルの為替が送られてきた。その金は、日本を通りすがりのアメリカの一実業家が「ヴォーリズ氏の自活の道が立つまで」月々の援助を約束されたものだときき添えられていた。約束どおり、自給できるようになるまでの三年間、毎月同額の為替が届けられた。

ヴォーリズが大津の馬場に鉄道YMCAを建設する計画を立て、明治四十三年(一九一〇)欧米へ募金の旅に出た時、シカゴ市のオーケストラ・ホールで開かれた平信徒宣教会でたまたま面識をえたメンソレータム社の創立者A・A・ハイド氏こそ、その時の匿名の篤志家と判明した。氏はちょうどその頃日本を訪れ、ヴォーリズの「神の国建設」の志に痛く感激したのであった。

ヴォーリズはカンザスで生まれたが、同州出身のハイドはウィチタのプレスビテリアンで、彼もまた教派を超えた伝道に熱心な平信徒であった。不動産売買で産を成した彼は、一八八四〜五年の頃、折からの不況で資産を失った。破産する前に、ウィチタYMCAの建築資金三万ドルを寄付する約束をしてい

た。完納しないうちに不幸に出合った彼は、神との約束を果たすため、子供八人の大家族を抱えながらも、家屋敷や目ぼしい財産を売り払って寄付の約束を果たし、裸一貫になって長屋暮らしから再起をはかった。YMCAへのハイドとヴォーリズの献身は全く共通している。さて、ハイドの堅実なカムバックを可能にしたのはメンソレータムの発明である。

メンソレータムがその後日本で発売されるようになるのは単なる偶然ではない。青年のころ東洋に遊んだハイドは、横浜の街頭で目に入った奇妙な膏薬(うち)を一個買い求めた。多分主婦には欠かせなかった「あかぎれ膏」か「ガマの脂」の類と思われる。その効能が非常にすばらしかったことを思い出し、破産の窮余の一策として、それに似せた膏薬を発明した。これがメンソレータムである。主原料は日本産メンソール(薄荷)とカンソール(樟脳)である。敬虔なハイドは、創業に当たり、メンソレータムの売り上げ収益の十%は福音伝道、社会教育などに献げますと神に誓った。会社は大成功を収め、幾十年もの間に献金は売り上げ収益の二十%、三十%……そして九十%にも達し、正に「キリスト霊薬」

の名のとおり肉体的のみならず精神的苦痛を癒す霊薬として神の事業に奉仕したのである。シカゴでハイドと別れる際、ヴォーリズはメンソレータムの見本を一個貰って帰った。

この旅から日本に帰る時、ヴォーリズには二人の同行者があった。一人はコーネル大学建築科を終えたばかりのS・V・M・(海外伝道学生奉仕団)奉仕隊員チェーピン、もう一人は外国伝道に熱心で、後日牧師となって同じ道を歩むことになるソーン青年である。同労者が二人増えた近江ミッシオンは着実な前進発展の時期を迎え、また、労働者への伝道を目ざした馬場の鉄道YMCAも完成し、何百人かの鉄道従業員の道徳的・精神的修練の場、憩の場として歓迎された。やっと思つく暇を得た吉田は、本格的伝道修業のため大正元年に渡米、ニューヨークの聖書養成学校(のちの神学校)に入学した。翌年の初夏には、後にふれるごとく、モホンク湖畔で開かれたYMCA主催の国際キリスト教会議へ、日本からの代員としてヴォーリズと共に参加。その頃すでにその卓抜な語学力をジョン・R・モットに認められていた彼は、YMCAの旅行幹事を委嘱され、全米三十八の大学を訪問

してJ・S・C・A・(日本人留学生キリスト協会の組織作りに奔走した。その途中、モット氏がその生みの親、育ての親であるS・V・M・大会にも出席した。

カンザスで行われたこの大会(一九一三)も盛会で、大会の代員総数四千名、日本人も約二十名出席していた。その日本人出席者のうちカリフォルニアから参加した留学生の六人組が、帰りの旅費を使いはたし、吉田に金を工面して欲しいと泣きついていた。旅行幹事は旅先での募金を禁じられていたが、「特別な事情だし、個人的に頼むのなら構うまい」ということで、会の終わったころ、ひとりの白髪の老紳士に面会を求めた。「あの人は偉い人だから、多分力になってくれるだろう」と同僚の幹事に教えられたのである。事情を聞いたこの老紳士は、おもむろにポケットから小切手帳を取り出し、目付けと名前を書き入れると、金額欄は空白のまま吉田に渡した。「いかほど頂けるのですか」と不審そうに見上げる吉田に、「必要なだけ自分で書き入れなさい」と無造作にこたえた。「君はどこから来たのか」と聞かれ、近江から、と答えた途端に話はずみ、その老紳士が匿名の

為替で近江ミッションをたすけた陰の後援者、かねがねヴォーリスから聞いていたハイドであるとわかった。(未完)

(大学文学部教授・アメリカ研究)

(注)

- ① 財団法人近江兄弟社(昭四十五)
- ② “The Jesus Medicine,
メンソレータムの箱の中に「キリスト教に関する御質問歡迎」のチラシを入れたため。
Merrell V. Hittsyanagi, *A Mustard Seed in Japan* 北星堂(昭三十四) p. 68
The Omi Brotherhood As Others See Us
(Articles Collected by Maki V. Hittsyanagi) (1964) p. 5
- ③ 朝日新聞 昭四十九・十一・二十四(夕刊)
- ④ Ibid.
- ⑤ 『湖畔の声』(第一号 明四十五・七・十五
第六八四号 昭四十七・一
(六十周年記念号))
- ⑥ ヴォーリスに一大決心をさせた一九〇二年のS・V・M・世界大会については拙稿「W・M. VoriesとS・V・M・トロント大会」(同志社アメリカ研究第十二号、一九七六)参照。
- ⑦ *A Mustard Seed in Japan*, p. 14
- ⑧ 大正七年、福音の宣伝各施設、近江サナトリウムの事業一切をまとめて「近江キリスト教慈善教化財団」とした。これが現在の「財団法人近江兄弟社」であり、メンソレータムの製造販売許可契約は、米メ社が財団法人近江兄弟社と直接契約を結び、株式
- ⑨ 会社近江兄弟社は財団から再実施権を供与されていた。病院、学校など社会事業をしている財団に資金が落ちるように、株式会社近江兄弟社はメンソレータムの売り上げの十%を財団に支払い、財団は、うち三十%を米メ社に送金する仕組みになっていた。米原にも鉄道YMCAを作った。もともとYMCAは「ロンドンの雑貨商ジョージ・ウィリアムズが、一八八四年に青年従業員の精神向上のために創設したものであるが、瞬く間に広がり、アメリカでは一八五一年にボストン支部が生まれ、大学生、鉄道従業員、工場労働者、軍人、はてはニグロ、インディアンの間にも浸透した。日本へYMCAを導入したのは神田乃武で、彼がアメリカ留学から帰った明治十三年新宿町の京橋教会で最初のYMCAを築き立てた。ヴォーリスは八幡商業学校にYMCAを作り、恐らくH・Yは日本ではこれが最初であろうと言っている。純潔を説き、禁酒禁煙はもちろん、「四gの精液は二〇〇gの血液に相当する」と健康上の理由もあげて自慰を戒めている。
- ⑩ John R. Mott (1865-1965)
コーネル(哲学士)・イェール(修士)・エディンバラ(L・L・D)。YMCAの国際委員会学生主事を皮切りに、アメリカYMCA、万国YMCA、YMCA世界同盟、海外伝道学生奉仕団(Student Volunteer Movement)、万国学生キリスト教連盟などの幹部として活躍。ノーベル平和賞以外に、日本の瑞宝章を含め、多数の国から勲章を受けた。なお、下記の資料を随所で使用した。
一 柳米来留「失敗者の自叙伝」近江兄弟社(昭四十五)吉田悦蔵「近江の兄弟」近江兄弟社(大十二)

同志社交響楽団の50年

「おもちゃ」から「第九」まで

貞 方 敏 郎

同志社交響楽団は、同志社創立百周年と年を同じくして栄えある五十周年を迎えた。大正の末期に十数名の有志によって発足した、学生による一オケストラ、というより室内楽団の名に相応しいもので、「おもちゃの交響曲」やハイドンの小交響曲などから練習を始めた。それが五十年を経た現在、部員百三十名を有する一大楽団に成長し、全国に数多い学生オケストラの中にあって注目すべき存在として堅実な活動を続けている。ま



同志社創立60周年記念メサイア演奏（昭和10年）

た、ここを果立ったOBの数は五百名を超えて、全国に散在している。創設当時から幾多の風雪に耐えつつ茨の道を歩んできた先輩たちの志に支えられた長い歴史の間に、この楽団が体験した数々のできごとを、残された不完全な資料と記憶をもとに、詳細かつ正確にはとうてい述べ尽くせるものではないことはもちろんであるが、目下、創立半世紀という時代の区切りを迎えるに当たり、「同響五十年史」を苦心編さん中で、近く発刊の予定である。たまたま本誌編集部からのご依頼により、同志社音楽部の歴史中に特筆し得るところを、二、三思い出すまま記してみよう。

四十年前に同志社が創立六十周年を迎えたとき（昭和十年）に、何か同志社学園に相応しい音楽の行事をやるという企画が出され、当時、グリークラブや混声合唱団の指揮者を務めていた森本芳雄氏（故人、神学科助手）が中心となって、この計画を強力に推進し、幸い同志社シンフォニーオケストラ（同響の旧称）があるから、混声合唱団と共演でヘンデルのメサイアの全曲演奏を行おうということになった。当時同響は、弦楽部のメンバーだけは

揃っていたが、管楽器の奏者が揃わなかった
ので、モツアルト、クリザンダー編曲のもので
なく、原典の原曲の弦バートだけでやること
になった。四名のソリストは、全部同志社出
身者で、わが国の楽壇を代表する錚々たる音
楽家ばかりで、喜んで母校の壮挙に馳せ参
じた。ソプラノ 竹内禎子、アルト 斎藤静子、
テノール 太田黒養二、バス 内田栄一といった
面々で、指揮は森本芳雄氏であった。オーケ
ストラと混声合唱の共演など、当時数少ない
男女共学の学園で容易に実現できない異色あ
る大行事で、公演は京都と大阪の二か所で行
われたが、いずれも立錫の余地もない盛況で
あり、各新聞は挙ってこれを報じ、NHKは、
このために特に全国中継放送を行った。まだ
民間放送などなく、権高かと思われていたNHK
がこれを取りあげ、しかも全国中継をやる
ことは、当時としては画期的な社会的事件
とも言えることであった。ただしその代わり、
時間の都合で第二部の終曲を飾るハレルヤ
コーラスの大合唱で終わり、第三部はカット
されて、折角の六十周年記念行事にメサイア
全曲演奏の形がとれなかったのは、今でも
残念の思いが残るが、宗教音楽の精髓と「良

さ」を内外に周知せしめた業績は、同志社音
楽部史上特筆すべきものと言ってよからう。
これを皮切りとして、その後数年間メサイア
演奏会は同志社の年末行事として続けられ、
戦争中一時とだえたが、終戦後随数年にして
復活、創立九十周年には正式な学校行事とし
てメサイア実行委員会が設置されて、同響が
主導の役を果たし、爾来、今日まで学園に欠
かせぬ年中行事のひとつとなっている。演奏
規模も充実し、今ではもっぱらモツアルト、
クリザンダー編の二管編成となり、全三部の
完全演奏を毎年行っている。

昭和十四年、戦時色がようやく濃くなり始
め、楽器などをあまりおおびらに持ち歩きす
るのに気がひけるような空気になっていた
頃、京都朝日会館ホールで、当時名実ともに最
盛期にあった同響の定期演奏会が開かれた。
丁度その時、バイオリンの天才少年と謳わ
れ、早くからその名を知られていた宮本政雄
氏（昭15大経卒、現大阪音大教授、同響常任指揮者
が同大に在学、同響部員として大活躍中であ
った。まだ揺籃時代を脱したばかりの日本の
楽壇では高名の大家であった、モグレウスキ



定期演奏会（昭和14年）

ーやクレーンに師事して、弱冠十七歳にして
その優れた才能を認められていた。そしてこ
の演奏会に、同君がベートーベンのバイオリ
ン協奏曲ニ長調を弾くことになったのである
が、たまたま京都在住の東久邇宮一家が来
聴することになり、準戦時下のこととて、皇
族一家のご臨席とあって同志社は上を下への
大騒ぎとなった。実は、その頃グリークラブ



第九交響曲公演（昭和50年）

やマンドリンクラブなどが歴史も古く、既に全国に名を馳せており、その活躍ぶりは誰しもが文句なしに認めるところであったが、我がのオーケストラは楽団編成の性質上、部費予算を食う割合には活動は低調で、どちらかと言えば学友会の嫌われもので、何かにつけ継子扱いを受けていたものだが、この日ばかりは総長（牧野虎次氏）を始め学校当局のお偉方

一同が、フロックコートやモーニング姿で会場に駆けつけ、歓送迎申し上げるという前代未聞の音楽会となった。この日の演奏では、部員一同は大張り切りで、宮本君の銘器ガルネリウスの音色はひとときわびえて、大成功裡に幕を閉じ、一同大いに日頃の溜飲を下げたものである。この時の指揮は、建田敏吉氏（昭2大英卒）がとった。

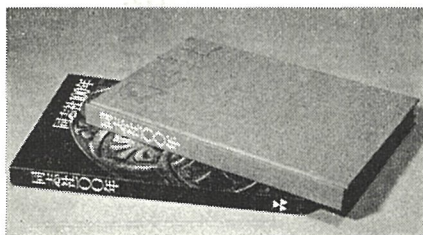
戦時中すべての音楽部は仮死状態にあったが、戦後同響は一早く復活し、復員したばかりの宮本政雄氏を指揮者に迎え、昭和二十二年に早くも「ベートーベンの夕」と銘を打って第十八回定期演奏会を開き、戦後の荒廃した人心に潤いを与えた。一方、北は北海道から南は四国、九州の各都市へ毎年演奏旅行を行い、機会に恵まれない地方の人たちに、生の良き音楽を聴かせると同時に、オーケストラの歴史、その構成、種々楽器の解説などして大いに啓蒙に尽くした。戦後、新制大学への切り替えと同時に学生数が急増し、また、女子大学の参加により着々と部員が整備されて、学生のみの手で二管または三管編成のオーケストラへと規模を大にして大楽団へと生

長して行った。そして昭和三十六年から立教大学オーケストラとの合同の交歓演奏会が毎年持たれるようになって、同響の黄金時代が始まる。立教オケと同響は互いによりきライバルとして、年ごとに曲目のレベルアップを競い、これまでのレパートリーとしては、チャイコフスキー、ドボルザーク、シベリウス、ラフマニノフ、ストラヴィンスキー等々、戦前には夢想もしなかった大曲を次々と手がけて、一般聴衆の音楽的素養を高める一助となる程にまで生長した。昭和四十三年には全国に散在するOBは五百名を超え、その年の秋に「同響OB会」を結成、初代の会長、副会長にそれぞれ宮本政雄、貞方敏郎（昭8大英卒）の兩名が選ばれて、毎年総会を開いて会員相互の親睦を図る一方、現役学生に少なからぬ物心両面の援助を与えている。

同響最近の特別な行事としては、創立五十年記念演奏会として、昨年十二月、京都会館ホールで待望のベートーベンの第九交響曲「合唱」を公演したことである。この公演で特筆すべきことは、百名近いオーケストラ部員中一人の臨時雇いもなく、OBの数名が参

写真集『同志社100年』刊行

同志社は新島襄をはじめ、百年にわたる諸先輩の努力によって受け継がれてきた貴重な文化的遺産を有している。また、北は北海道から、南は九州熊本にいたる全国各地に、さらに、遠くアメリカの地、ボストンを中心とするニューイングランド地方にまでも、新島襄ゆかりの多くの遺跡を現存している。これら貴重な文化的遺物・遺跡を、百年を迎えた同志社人が内外に探訪し、カメラの眼を通してできるだけ広く記録し、さらに現在の同志社の生きた姿をありのままにとらえて後世に伝えたい意図のもとに、写真集『同志社一〇〇年』が、創立百周年記念事業の一つとして企画され、今回刊行をみたわけで、次の内容のある写真が、現在可能な限りの優秀なカメラ・ワークと印刷技術を通して、編さん、収録されている。



加しただけで、すべて現役学生のみの手で行われたこと、また合唱部もソリストを除いてすべて学内の合唱団及び有志の人たちばかりの演奏であり、また指揮は宮本政雄氏であり、五十周年を飾るに相応しく大盛會裡に終わったことである。「おもちゃ」から「第九」まで——思えば大正の末期に十数名が集まった「おもちゃの交響曲」(L. Mozart, Kinder-Symfonie) から始めて、古典の最高峰であるベートーベンの第九「合唱」の公演まで五十

年の歩みを続けた同志社交響楽団には、まだ洋々たる前途があると思う。現在全国に無数に誕生した学生オーケストラも、既に過去の学芸会的な活動の域を脱して、各地方地方の楽壇をリードするまでに優れたものも見られる。その昔、プロのオーケストラがまだまだ存在しなかった頃から、学生オーケストラは次々と誕生し、ある資料を調べてみると、こうした学生の手になるオーケストラによって、本邦初演が行われた曲が少なからず見出

されるのに驚いた。ベートーベンの交響曲や序曲の中の幾つかもそうである。同響がその昔公演したシベリウスの「フィンランディア」や難曲「伝説」なども、案外本邦初演だったかも知れない。こんな点でも、学生オーケストラが文化活動の向上に一翼をになった事実を信じたい。同志社交響楽団もその中の一員として。

(太学文学部教授・英語学、同響OB)

内 容

体 裁

- 第1部 同志社のキャンパスと建物
- 第2部 同志社の現在
- 第3部 同志社の遺跡・遺物
- 豪華 上製本 (綴クロス貼 化粧ケース付) (価二、〇〇〇円(送料八〇〇円))
- 並製本 (上質紙貼) (価九、〇〇〇円(送料八〇〇円))

A4判 二〇〇頁 (カラー九十三点、モノクローム七十二点)

高級美術印刷 オフセット多色刷

なお、『同志社一〇〇年』の別冊ともいえる『同志社一その一〇〇年のあゆみ』(上製本・並製本)も同時に刊行された。

発行所 同志社
印刷製本 日本写真印刷株式会社
発売方法 同志社収益事業課